



仲よし双子の姉妹です!

鴻巣 古川久子さん 31歳

小さく産まれた我が家の娘たちもスクスクと成長し、1歳半を過ぎた今では毎日元気に走り回っています。恥ずかしがり屋だけどいつも妹を気遣う姉の真子(写真右)。体は大きく力持ち、だけど甘えん坊で泣き虫の妹の理子。お腹の中からずっと一緒に時間を過ごしてきたのに、性格も好みも全く違うなんて不思議ですね。時にはケンカもしますが2人仲よく遊んでいる姿は、とても微笑ましく見ていて私もうれしくなります。双子の育児は大変ですが、いつでも手助けをしてくれる両家の家族や友人たちにはとても感謝しています。

いつかは別々の道を歩む2人ですが、いつまでもお互いを思いやり助け合える仲のよい姉妹でいてくれることを願っています。



姉の真子ちゃん(右)と妹の理子ちゃん(1歳8か月)

マイカーデビュー 花は心と体の特效薬

私が最初に花に興味を持ったのは、バラの花との出会いです。友人宅に咲いている枝をいただいて差し芽をして、今では10種類くらいになりました。



6年前にボランティアで市内清掃に参加して、玄関や店先にプランターや鉢植えなどが置かれ、いろいろな花が咲いているのに感動しました。それから私も四季折々の花を植え始めました。飲食店をしているため、駐車場所に場所をとられ植える所も限られてしまい、3年前から店の前の国道沿いの銀杏の両脇にキンケイ菊を植え、今年はその距離が200mくらいになりました。5月下旬に見事に咲き、近所の方々に「きれいね」と言われ植えてよかったと思いました。



牧野地の中根幾子さん(55歳)

仕事に追われる私にとって、花と触れ合うことは心と体をリフレッシュする特效薬なのです。

KOGA 万華鏡

マチの光景

5歳のときに郊外の住宅地へ転居した私は、両親の買い物について行くたびに、しばしば「マチへ行く」という言葉を耳にしました。父親の自転車の荷台にまたがったまま、今住んでいるここはマチではないのだからかと、子どもながらにいぶかったものです。いったい、マチはどこにあるのだろうか。自転車は国道のバイパスを越え、製糸工場の跡地を見ながら、旧古河城下の足軽屋敷を通り抜けてゆく。当時、開かずの踏切と呼ばれた踏切で、何度も往復する貨車を眺めてから、旧日光街道に出た。そこにマチがあったのでした。まだ、古河に大型店舗や郊外店が出店する以前のこと。



めでたい(撮影:昭和30年横山町)

「どこに「マチ」はある」
費の地、そして娯楽の地。また、古河のような伝統的都市は、積み重ねられた歴史に基づいて政治や経済、文化の中心を担ってきました。そこには華やいだ場があり、怪しい場があり、危ういところがある。光と闇の配分は、人々の胸を躍らせたことでしょう。マチはさまざまな色彩と、祝祭的なムードに満ちあふれていたのです。

かつて伝統的なムラでは、日常的な生産消費生活と、非日常的な祭り日などによって、生活リズムを整えていました。マチはその非日常を空間としていたのです。たとえば10月20日の恵比寿講には、呉服の端切れを買い取るために近隣の農村から古河へやって来るのが常でした。買い物へ向かった先には、さまざまな店が軒をつらねている。そこには何でもある。生活物資だけでなく、音も匂いも、危険も欲も、光までも。ムラで意識されていた時間の流れが、ひとつの空間として存在しているのです。そこでこう考えた。マチはマチにしかないのだと。【近代古河アルバム」は9/23まで】

そういえば、そのころのまつりといえば、雀神社の夏祭り、横山町の七夕飾り、渡良瀬川の土手で見られる花火、菊祭りの菊人形と演芸館。そこには、自分の住んでいる郊外では味わえない興奮がありました。どうやらそれもマチの側面のようにです。

古河歴史博物館 学芸員 立石尚之